HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第２報告
Author(s)	日置, 真世
Description	E：パネルディスカッション　テーマ：人が育つシステムを再考する　「遊ぶ・学ぶ・働く　：　持続可能な発達の支援のために」シンポジウム報告書：子ども発達臨床研究センター総合研究企画(2011サステナ企画)．　平成23年11月2日(水)～4日(金)．　北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟　教育学研究院会議室．　札幌市
Citation	「遊ぶ・学ぶ・働く　：　持続可能な発達の支援のために」　シンポジウム報告書, 94-112
Issue Date	2012-05-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49392
Type	conference paper
File Information	Hioki.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第 2 報告

発表者：日置　真世
（NPO 法人地域生活支援ネットワークサロン）

はじめに

皆さん、おはようございます。先ほど宮﨑さんからすごい大げさな紹介がありましたが、主催の子ども発達臨床研究センターの学外研究員でもありますが、これまでのプログラムに参加者として一昨日の夜から通しで参加して、いろいろなアイデアをもらったりしているということで、みなさんと同じ参加者の一人です。あらためて自分のやってきたこととか、これからやっていくことのヒントがもらえました。また、今日は、向谷地さんと話をするのを楽しみに来ました。

今、向谷地さんの話を聞いていて、自分のこれからの話とちょっと無理やり位置付けると、三角形の図形が途中でありましたよね。それで、向谷地さんが、この頂点にある病理でしたっけ？　一番上が、病気ですよね、この状態からの三角形の回復の過程と、ああ、同じだなとは思ったんですけど、主に私の場合は、病気ということに限定せず、生きづらさという、中間あたりの、生活レベルの生きづらさというところを誰もが、生きていれば持っているだろうと。だからそこで当事者、「生活当事者」という私は言い方をするんですけど、「生活当事者」として自分たちの課題とか、社会みたいなものに、向き合っていく仕組みをどうつくれるかということをずっとやって来たと思いますので、その辺を踏まえてお話をしたいと思います。

いつも向谷地さんが当事者の方を連れてくるのは、よく見掛けていたので、私も連れてきたいなと思ったんですけど、なかなか付き合ってくれる人もいないので、今日は映像とか写真で、皆さんに釧路の現場の声も伝えたいなと思っています。

生活当事者として　自己紹介

まず、自己紹介をしながら、何をしてきたかということをお伝えすると、私はもともと自分の子どもが重度の障がいを持っていて、そこからこういう活動に入りました。マザーグースの会という親の会に出会って、そこから出発をしています。娘が 3 人いますが、長女がレット症候群という重度の障がいを持っていて、そこからスタートしましたが、真ん中の子が、それこそ 1 日目の青木先生の話でいうと、まったく診断の必要のないアスペルガー症候群なので、1 回も診断を受けたことはありませんけど、非常に生きづらさを持っていて、途中で学校を、本人いわく「不登校ではない」と言いますが、「学校が必要ない」って自分で決めて自分の道を進んでいるような、ちょっと生きづらさを持った次女もいたりします。

あと、自分自身もあんまり、認知でいうと、定型発達ではないと思っていて、自分自身も何か人とは違う部分があることに、「何なんだろう」と思いながら、自分も広い意味で生活していく当事者、いろいろな生きづらさを、日々家族も自分も含めて感じているというところから出発をしています。

その後、その親の会をきっかけとして、釧路で NPO 法人を 2000 年に立ち上げまして、事務局代表として 8 年間、従事しました。そこではいろいろな事業を立ち上げたりして、結果として NPO 法人が

すごく大きくなって、昨日の「働く」というセッションでは非常に興味深く聞ききました。今の主流である働き方というものを、私は社会人を経験したことがないので、まったく普通の企業がどういう働き方をしているというのを知らずに自分がNPOを立ち上げたので、自分のやってきたことが普通だろうと思っていたのですが、どうやらそうではないらしいというのを最近よくよく気付かされています。あらゆる人がその人らしく働ける職場というのをどうしたら実現できるかというのを、無意識的に同時にやってきました。だから支援の場をつくると同時に、人の働く場とか活動する場というものを、あんまり意識せずにいろいろな形でつくってきたという8年間でした。

その後、縁があって、今日この企画を立てている、子ども発達臨床研究センターの助手として、2008年から3年間、今年の春まで研究をする機会を得まして、いろいろな自分のやってきたことや、仲間がやっていたことを研究するような立場を持ちました。同時に、もともと私は現場人間なので、札幌市の教育委員会からスクールソーシャルワーカーという役割をいただいて、今現在も継続して、地域で暮らすいろいろな人たち、親子や、あと、学校の先生の相談にのったりすることもやりながら、3年間を過ごさせてもらいました。現在は、フリーな立場になって、釧路を含む全国の生活当事者の社会活動を応援するという意味で、「北海道から地域づくりを、創造・発信する場づくり師」という怪しい肩書を名乗って、いろいろな活動をしているところです。

社会をつなぎ直す「場づくり」

つい先日、九州大学に呼ばれて自分のやってきたことをお話ししたら、九州大学の先生がこんなふうに評価・説明をしてくれて、「ああ、そうだそうだ」と思ったので引用します。

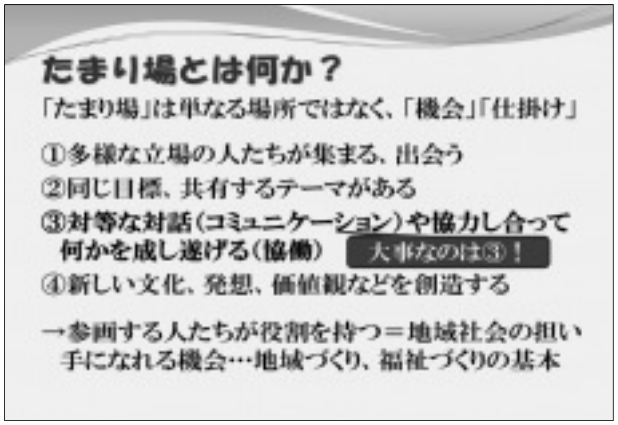
『細分化、分断化、専門化されてきた私たちの社会の仕組みが、子どもが育ち、大人になるということ、働くということをどんどん難しくさせてしまっている。日置さんたちの試みは、そうした社会のゆがみを、少なくとも目の前にいる人たちが、生きることに向き合えるようにつなぎ合わせているんですよね』という言い方をしてくれて、ああ、すごくいい表現をしてくれたなと。

本当に少なくとも目の前にいる人たちが、自分が生きるということにどう向き合えるか、その環境づくりというものをずっとやってきたなと思っていますので、今日もちょっとそういう話を、具体的にどんなことをやっているかということを言いたいと思います。

では、つなぐときに大事なのは、たぶんこの辺は向谷地さんと重なると思いますが、やっぱり当事者が大事だと、当事者を中心にいろいろなものがつながっていく、つなぎ目をつくっていくということが重要だろうと思っています。具体的に何をしてきたのか、しているのかということを、私は「たまり場」とか「場づくり」という言い方で言っています。一言で言えば、この十数年間、自分は「場づくり」をひたすらしてきました。

「場づくり」というのは、誰もが社会の一員となることができ、そこから生活、社会が創造される「たまり場」というものを作っていくことを「場づくり」ととらえています。例えば、私が所属していた、最初のきっかけになった「マザーグースの会」という親の会も、「たまり場」的な親の会です。「たまり場」は後で説明します。あと、ネットワークサロンという組織は、たまり場組織であり、たまり場的な職場であったと思いますし、後で紹介する、コミュニティハウス冬月荘という地域拠点もたまり場拠点。そこで行われている勉強会は、たまり場学習会だし、去年の5月にスタートした、地域起業創造センターまじくるという、これは仕事をつくっていく場なんですけど、そこもたまり場の働く場づくり。

あとは、そうしたたまり場的な事業をつなげるような、「全国まじくるネットワーク」という、全国の実践者のつながりをつくり始めています。要は、多様な地域、生活の場面に、この「たまり場」要素を埋め込んでいくということが、目指してきたことだなと。無意識的なので結果論で説明していいますが、こういうことが必要だとか思ってやっていたわけじゃなく、感覚的にいろいろな人たちとつながって話し合うことで、こういうことがきっと大事なんだろうということにあらためて気付いたということです。



たまり場とは何か？

じゃあ、最初に、「たまり場」って何だろうということを簡単に紹介したいと思います。私は、たまり場の段階的な４条件と呼んでいますが、４つの条件があると整理しています。

１つは、多様な立場の人たちが集まる、出会うということで、要は多様性があり、それが受容されているというのが１つ目の条件です。昨日、「学び」のところでも、同質集団というようなことが話題になっていましたが、私はやっぱり同質集団には限界があると思います。今の教育や福祉の現場は、とかく同質集団で物事が進んでいくというところに限界があると思っていますが、とにかくいろいろな人がいるというのがいいと思います。これは、実際に集まる人たちの声からも予想以上に、いろいろな人がいるということの効果が聞かれています。

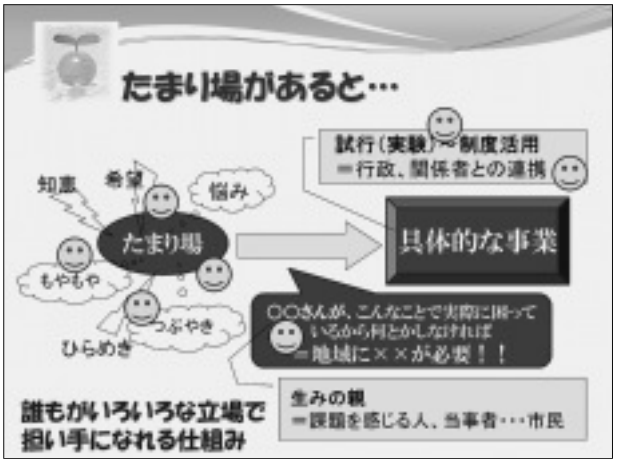
２つ目に、いろいろな人がいても、何かしらみんなで共有しているテーマがあることが大事だということです。それじゃないと活動や仕掛け自体がばらばらになったりしてしまうので、みんなで例えば本当に、簡単なことでいいので、「この町を元気にしたい」とか、「子どもが健やかに成長するために」とか、「一人一人が自分らしく生きられるように」みたいな、何でもいいので誰もが納得できるような何か共有するテーマがあるということです。

３つ目が、これが一番大事なのです。１と２だけが形式的にそろっている機会は、実は世の中にはたくさんあります。３つ目が実は難しくて、そういういろいろな人が集まって共有するテーマがある場で、対等な対話、コミュニケーションが重要です。あと、協力し合って何かを成し遂げるという、実働の上でのつながりみたいなものが、保障されているということがとても大事だと思います。たぶん、向谷地さんがやられている当事者研究というのもきっと、とにかく話をするということがあると聞いていますし、研究ということを一緒にみんなでやるというのがすごく大事なんだろうなと思います。それを通して新しい文化、発想、価値観などが創造されるという、この４段階になります。

でも究極的にいうと、１番の多様な立場の人って書いていますけど、実は、１日目の青木先生の話を借りると、一人一人が本当は多様な存在で、違う人間がいれば絶対多様性がそこにあるはずなのですが、あたかも多様じゃないかのようにふるまってしまう側面もあるように思います。せっかくの多様性がいかされないのはもったいないです。本当は、一見、同質集団に見えたとしても、本当は多様なんだろうから、一人ひとりの個性が生かせるような機会を作ることがとても大事です。

たまり場の効果

時間が今日はないのでぱぱっといきますが、たまり場があると、これはたまり場システムを説明した図ですけど、要は、社会において、「たまり場」というのがあると、「たまり場」に集まってごちゃごちゃ話をする人も大事だし、自分の困り事を表明する人も大事だし、実際にその困り事に対してアクションを起こすという人たちも重要になってくるわけで



す。

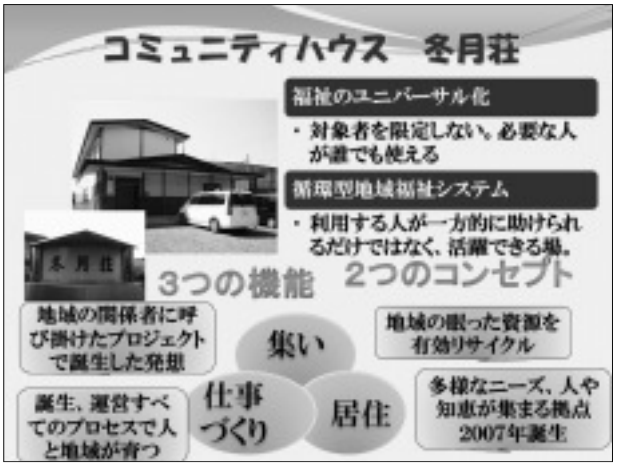
どうしても地域課題を解決するということを今まで言うときには、活動というと最後のこの実行する人だけが活動しているかのように扱われていたような気がするのですが、本当はその前の段階のたまり場で、それぞれの思いや、ごちゃごちゃしたことを言うというそういう役割の人や、自分の困っていることを表明してくれる人がいなければ、社会というのは発達しないと思うのです。今日のテーマは「持続可能な発達を可能にする支援」ですが、そのテーマに即してもこの全体の仕組みが大事だろうと思います。それは、一人一人がいろいろな立場で、困っている人も含めて、「課題を持っている人こそ活躍できる」というような仕組みであると思っています。

たまり場というのは、実にいろいろな形で誰もができることです。形はこだわっていないので、イベントや事業でもできますし、公式な委員会や協議会でもできますし、ネットワーク組織みたいなのでもできますし、身近なサークル、町内会とかでもできますし、あとは、私がやっていた事業型の NPO や、企業として職場としてもつくることができるし、プロジェクト的な事業ということでもできる。いろいろな形がある方が理想的であって、規模やスタイル、表現の仕方は別に限定をしないで、機能さえ備えれば、社会の至るところで実はできると思っています。

釧路実践の「たまり場」

これから例を紹介したいと思います。その「たまり場」的な事業として最も象徴的なのは、コミュニティハウス冬月荘という 2007 年に釧路で、みんなで、地域の人たちでプロジェクトを組んでつくった事業です。これは使われなくなった北電の社員寮だった建物を活用して、地域課題を解決する万能ツールとして、みんなで「こんなものがあったらいいね」ということでつくりました。

簡単にコミュニティハウスは何かという仕組みを紹介します。要は拠点があって、コーディネーターという人がいるだけでいいのですが、これだけじゃ何も機能はしません。地域の中の、「こうだったらいいのにな」とか、「こんなことで困っている」とか、



「こんなことができないかな」と思っている、地域の中でよく必要なことを知っている人とか、実際に悩んだり困ったりしている人たちが、このコミュニティハウスにつながって、「こんなことができそうだ、やってみよう」ということで、解決に向けて何らかの手だてを講じる、みんなが担い手になる、かかわることができる、こういう拠点をコミュニティハウスというふうに名付けて実際にやり始めました。

私は、地域の中でいろいろなことを知っている人をニーズマスターと呼んでいて、課題を感じている人たちは当然当事者ということになりますが、これらのニーズマスターや当事者といかにコラボするかというのが、コミュニティハウスが機能する重要なポイントということになります。そこで代表的な事業として、ずっと今も続いている事業としては、「みんなで高校行こう会」（後に「Z っと！Scrum」（ずっとすくらむ）という自主名称へと発展）という、中学生の勉強会があります。

冬月荘創造の看板事業「Zっと Scrum」

勉強会が始まったきっかけを作ったニーズマスターは市役所の職員の方でした。釧路は生活保護率が非常に高くて、5％を超えていますが、いまだに増え続けています。「この前までは 20 人に 1 人が生活保護世帯ですと言っていたのが、いや、19 人になったんだよね」ってこの前言っていましたが、「今度 18 人か 17 人になりそうだ」という話のぐらい生

活保護の受給率は増え続けていて、世代間の連鎖も現場としては非常に厳しさを持って受け止められていました。

そんな厳しい状況をリアルに感じていた市役所の担当者が「何とか子どもたちの自立を助けたいんだ」ということで、課題を持ち込んでくれました。実際に釧路市も実態調査をしましたが、生活保護を受けている方の世帯では、塾や習い事に行く子どもは非常に少ない。一方、いじめや不登校を経験する率が高いというようなデータも出てきました。私たちとしてもいろいろ事業をする中で、勉強だけなく、やはり孤立している実態というのを実感していたので、そういう人たちが社会の一員になるチャンス、社会とつながりいろいろな人とつながれるということがすごく大事だろうという問題意識があったので、何をしようかとみんなで考えて、「この冬月荘で送迎給食付きの勉強会をしましょう、勉強だけじゃなくみんなの居場所になるようなやり方をしましょう」ということになり、スクラムが誕生しました。

実際にやると、「勉強が分かった」という子どもたちの声や、「いろいろな人たちと出会えた」という感想や、あと、実際に、子どもたちだけではなくていろいろな人たちがこの活動にかかわっているので、いろいろな人たちがいろいろな人たちとつながったり、活躍したりするような機会になっています。2008年の１月からこれはスタートしたので、もう今年で５期目に入って、１期生は今年の春に高校を卒業して就職をした子もいたり、あと、２期生が今就職活動をし始めたりしているところです。

活動の様子①　冬月荘

これから活動の写真を紹介します。冬月荘でやった事業の話はそれぞれにエピソードが満載で、いくらでも話が尽きないのでさっと説明します。

きよしクラブという事業です。これは、若年の認知症の方で、50代の後半で発症されて60代前半でだいぶ認知症が進行した方が主人公です。介護保険の認定は受けているんですけど、介護保険の事業所では全然ニーズが合わない、本人が行きたい場所ではないということで、非常に拒否をされていました。ただ、認知症は進んでいるので、ご家族が全部、介護しているという状態で、何とかこの方が楽しめることがないかということで、ニーズが持ち込まれました。

いろいろ考えてみたら、この方は氷川きよしの大ファンで、「きよしちゃん」ということではどこでも来てくれそうな感じだったので、冬月荘の中に氷川きよしの写真をいっぱいはって、いろいろ準備をして、氷川きよしの歌を歌ったりしゃべったりするサークルをつくろうということで、そういうきよしクラブというサークルをつくってやっているところです。

これは、多分、活動初日の様子ですが、ギターを弾けるスタッフがいたので氷川きよしの曲をギターを弾きながら歌いました。本人たちは氷川きよしの歌なんて初めて練習したと思いますが、「本当にこんなことをやって大丈夫か？」って半信半疑での取り組みでした。でも、やってみるとご本人が前にこうやって踊り出てくれて手拍子してくれて、とっても盛り上げてくれました。だから一番助かったのはスタッフで、一番役に立ったのはこのご本人だったというオチで、支援する側とされる側のまさに役割が入れ替わる循環型の典型のようなシーンでした。この方は、ここで少しずつ外に出られるようになって、家族の方も、社会とつながることができて、徐々にいろいろなところとつながって、介護保険の合うサービスを見つけて通えるようになったり利用できるようになったりしました。これがきっかけになってつながったということです。

あと、こちらは勉強会の様子です。遊んでいるところがいっぱい出るんですけど、勉強も普段はしています。これは第１期生の誕生会のシーンですね。あと、多様なゲストをたくさん呼びます。例えばこれは、生後１カ月の赤ちゃんを呼んできて、みんなで順に強制的に抱っこさせています。この赤ちゃんは、実は私のおいっ子で、妹がお産で実家に帰ってきているのをいいことに、「ちょっと来てよ」と言って呼んで参加してもらいました。

あと、子どもたちのアイデアでいろいろなことをやりますが、「料理をやりたい」という話になって料理コンテストをしたときの様子です。子どもたちが、何か新しいものを作ろう、釧路の新しい名物を作ろ

うと言って、「まりも焼き」というのをみんなが発想して作っているところです。ただ、たこ焼きにすごいたくさん青のりを入れて、緑色にしただけでした。特にその後、日の目も見ることもなく、子どもたちのささやかな楽しみで終わりました。これが試食会の様子です。

これは、勉強をしている場面です。ここにいる大人は2人とも、地元の教育大の先生2人で、中学生に一生懸命勉強を教えているところです。いろいろな人たちが来ますが、この奥にいる男の子は、ガンダムにしかほとんど興味のない子で、前のこの社会教育の教育大の先生が、一生懸命苦労して彼に何とか勉強をさせようとするんですけど、まあ、ほとんど失敗をしていました。

これは地元の社会教育施設のスタッフが、毎年受験にも出る理科実験教室というのをやってくれているシーンです。このスタッフは190センチぐらいあるとてもがたいのいい立派な大人ですが、この方が人気なのは、毎回実験に失敗をするということです。「大人も失敗するんだ」みたいなことで子どもたちは安心したり、また失敗した実験というのはすごく脳裏に焼き付くらしく、それが受験に出るとみんなだいたいほとんど書けるという効果もありました。わざとでは全然ないですが、いろんな角度から子どもたちの勉強の面でも効果が出ているようです。

あと、いろいろな人たちに出会う機会の別バージョンで、ちょっとアウトローな感じの大人にも来てもらおうということで、地元のバーのマスターをやっている方が来てくれた場面です。手に彫り物が入ってたりしますが、マジックが得意なのでマジックショーをやってもらっているところです。あとは、近くに神社があるので、毎年受験前にはみんなで合格祈願に行きます。

こちらはホームステイのプログラム。毎年アメリカの高校生を10日間ぐらい受け入れるプログラムを受けているので、その活動に子どもたちに参加してもらっているようなシーンです。これもそうです。

あと、勉強会のほかにも、親子ランチというのを冬月荘でやっています。これは子育て支援ということと、あと、仕事づくりということを兼ねて、親子が安心してランチを食べておしゃべりしてというようなことをやっています。親子ランチがいいのは、この親子ランチと勉強会がセットになってやる日が出てくると、さっきの中高生がこの子どもたちの相手をしてくれたりとか、自然な感じで役割がお互いにできてくることです。勉強会の子どもたちというのは、最初は自分が勉強がなかなか1人じゃできないからとか、生活保護世帯だからということでやって来ますが、実際にこういうところに来ると、子どもの相手をしてお母さんに喜ばれたりということが自然にできる。それがコミュニティハウスのすごいいいところだなと思います。

あと、これは暮らしている人たちです。冬月荘って暮らせるスペースがあります。今は、ちょっと見守りとかが必要な、家庭の背景がちょっと難しいような若者たちが、暮らしながら自立に向けていろいろな活動をしています。若者だけではなく、今はあんまり中高年の方はいませんが、この写真を撮った当時は、ちょっと年齢の高い方も一緒に住んでいたりしたので、その人たちと勉強会に来た子どもたちなどが、入り乱れて語らっています。この写真には「雰囲気がよいとき」という但し書きがありますが、こんなにいつも仲がいいわけではなく、トラブルもしょっちゅうあります。雰囲気のいい時も悪い時も含めて冬月荘には当たり前の生活の姿があります。住んでいる方が子どもの相手をしたり、あと、中高生がこんなふうに子どもと遊んだりという姿もあります。

活動の様子②　地域起業創造センターまじくる

次に、地域起業創造センターまじくるの様子です。釧路の一番の今の課題というのが、仕事がないということで、別に生きづらさを持った人じゃなくても仕事がありません。それを、ただ、「仕事がない、仕事がない」と言っているだけじゃなくて、一人一人の力を集めて何とかできないかということで、去年の5月にオープンしました。5分ぐらいの紹介映像があるので、それでご紹介します。

〈ビデオ上映〉

（AA）　最初の、自分、はっきりと正直、ここに来る前はすごい自分自身、まあ、いろいろありまして、

仕事も１月から失って、はっきり言って本当に気がめいっていた。そして、この中でここに来ることによって、毎日、毎日、何ていうんですかね、楽しくなってきて、はっきり言ったらここに来るのは楽しくなったんですね、自分が。

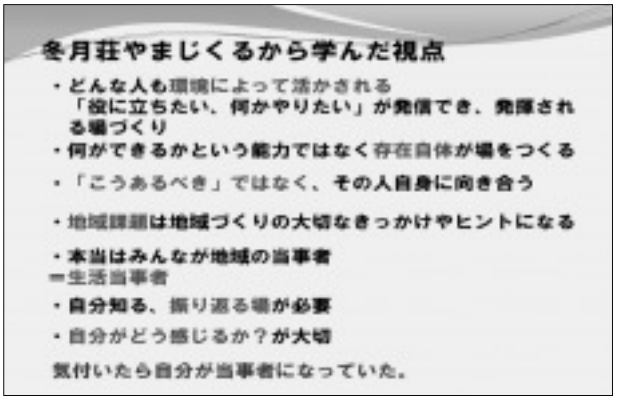
(BB)　まじくるで研修を受けていて、研修を受けて、やっぱり人前で抵抗なく話せるようにはなったのかな。それは変わりましたね。それとやはり、話す言葉じゃないですけど、わりと家族にも言われるんですけど、顔の表情と、それから冗談というか、ジョークをよく言うようになったというっていう。そういったことが顔の表情と生きがいを見つけたというのかな。何か目標を見つけて、顔の表情が。

(CC)　まじくるに来て、結構、今までって投げやりな感じだったから、自分、制度のことでもいろいろ言っていても、私が何を言ったって変わらないやぐらいにしか思ってなかったから、何に対しても結構そういうところは投げやりだったけど、意外とここへ来て何とかしようと思えばなるんじゃないかと変わったから、今まで投げやりだったことが、できることはやっていこうかなみたいな、というふうにはだいぶ変わってきているから、これからもそういうふうにしていこうかなとは思っています。

(DD)　将来の夢ができました。自分のパソコン教室を持ちたいという夢が持てました。
〈ビデオ終了〉

まとめ

まとめに入りたいと思います。今日はそんなに詳しくは話ができないのですが、こういう誰もが活躍できるような事業をするためにはマネジメント、組織論みたいなことも語られなくてはなりません。これまでの組織論の常識にとらわれない、柔軟な組織運営が必ず必要です。工夫が必要ですし、発想の転換も求められます。うちの職場はとても変わっているそうです。変わっているのは、私自身は社会に出たことがないので、あんまり知らなかったのですが、フラットに誰もが活躍できる仕組みをいろいろつくっています。その辺は、後半で話ができればと思います。最後にこれを紹介しようと思います。



これは、2007 年にさっき紹介した冬月荘ができたときに、一般公募でコーディネーターに採用されて、それまでまったく福祉とか教育とかということにかかわっていなかったスタッフが、「冬月荘やまじくるから学んだ視点」としてまとめたものです。これが当事者になるということ、これから人が育っていく社会ということに、私は示唆をくれると思ったので、最後に紹介したいと思います。

彼が言っているのは、どんな人も環境によって生かされる。役に立ちたい、何かやりたいが発信でき、発揮される場づくりが必要だと。何かできるという能力ではなく、存在自体が場をつくる。こうあるべきではなく、その人自身に向き合うということが重要だろうと。地域課題は、地域づくりの大切なきっかけやヒントになる。『課題は宝』と私も言っていますが、課題があることでいろいろなアクションが起きるんじゃないか。本当はみんなが地域の当事者。自分を知る、振り返る場が必要。自分がどう感じるかが大切って気付いたら、自分が当事者になっていたということを言っています。

本当の最後にこの写真を紹介します。当事者になっていたと語ったスタッフが真ん中ですが、これは最近の写真で、左側がガンダム好きな少年が成長して、高校３年生で就活をしている今の姿です。右の彼は、最近札幌から引っ越してきた、釧路に移り住んできた若者で、私も今スクールソーシャルワーカーで関わって卒業した若者ですが、彼を支えてきた先生たちから、「札幌一のダメ男」という称号を得

て釧路にやってきた筋金入りの支援が必要なキャラクターでした。そのダメ男君が2年間の冬眠を経て、釧路に行くということを今年の夏に突然、それまでいろいろ種まきはしていたのですが、言い始めて釧路にやってきて、今、住み込みで、若者の生活寮みたいなところで暮らしながら就活をやっています。

これは、元ガンダム少年の高校でのシーンです。高校生を対象に就活のお手伝いをする若者たちが中心となって「まじくるハイスクール」と自主事業を想像したのですが、それの宣伝・営業に行ったときに撮りました。制服を来ている左側の高校生と、「ダメ男」の称号を得た若者がスーツを着ているのに、真ん中のスタッフはすごい何とラフな格好をして一番緩い顔をして笑っているという、この図が最近私の中でも、釧路の活動を象徴しているなということなので、彼の言葉と写真とを最後に紹介したいと思います。すみません、長くなりました。あとは後半の議論でしたいと思います。ありがとうございます。(拍手)

向谷地氏・日置氏対談

(司会) お2人のお話で、実は、一見「困難」とか「病理」あるいは「困り事」と世間一般でいわれることの中に無限の可能性があることが指摘されました。日置さんは「課題は宝だ」とおっしゃいましたし、向谷地さんは、例えば「リストカットには当事者のものすごい自己表出のエネルギーがそこにあるんだ」と述べられましたが、そういう「発想の転換」といいますか、「問題のとらえ方」をしていくと、問題解決の仕方もずいぶん変わってくるというお話だったと思います。

そこで、これから討論したいことになるんですけれども、「締め出された人たちの声」がなぜ世間一般で受け止められないのかということと、それから本人たち自身のそこでの自己表出、自己表現、向谷地さんがおっしゃったと思いますけれども、「その中で何をどういうふうに獲得していくのか」というあたりですね。このあたりが、1つのポイントになるのかなと思います。

それから2つ目に、自分と社会との関係を転換していくときのツールとして、向谷地さんは「当事者研究」というものを提起されましたし、日置さんの方は「たまり場」というものを提起されたと思うんですが、この2つの方法、道具につきましても、かなりの共通点があったかと思います。同時にまた発想の違いもあるのかもしれません。そのあたりについても、お2人にいろいろとお話をしていただければと思います。

3つ目に、そういった2つのツールを通した回復のプロセス自体を、今度はどういうふうに見るのか、あるいは発達なり、あるいは主体の形成のプロセスと言ってもいいんですけれども、「生活当事者」という言葉もありましたし、向谷地さんは、「自己治療としての自治」とおっしゃいましたが、その場合の「自己なるもの」が回復されていくプロセスが、このツールを通してどんなふうに見えてくるのかというあたりも、もう少し比較できればと思っています。

最後、4点目ですけれども、学校とのかかわりもお2人は最後に紹介してくださいました。「学校改造計画」という形で小樽に通っていらっしゃる取り組みと、「まじくるハイスクール」という形で高校に通っていらっしゃる取り組みでした。つまり、福祉領域の2つの取り組みが、今、学校の中に、教育システムの中に組み込まれていっている。昨日の討論の中では、「学校の限界線をどう拡張すればいいのか」を考える場合に、乾さんの言葉では「いかがわしい空間」、「『いかがわしい人たち』が出入りするような学校をつくっていく」ということがヒントとしてありました。ある高校の先生は、「すかすかの学校をつくる」というふうにおっしゃっていますけれども、そういうような可能性がもしかしたら見えてくるのかもしれないと思いました。そのあたりも議論できればと思っております。

〈休憩〉

(司会) それでは再開したいと思います。お2人に感想を述べてもらって、そこから話を始めていきたいと思うんですけど、休憩時間の雑談の中で、お2人の話に共通しているのは、世間一般からすると、青木先生の言葉を借りれば社会から「締め出されてしまった人」たち、その人たちの中に、実は、ものすごく大きな可能性があって、新しい社会をつくる大きな宝というか、そういうものが秘められている

んじゃないかと見ていること、ということになりました。

その「可能性」や「宝物」を「現実の力」に変えていくために、いろいろな実践をされてきたと理解できるんですけど、逆に世間一般の人たちはそう見ない。依然として「締め出し」続けるわけですね。そのあたりなかなか理解し難い状況というふうにも見えるのかもしれないんですけど、「なぜそうなってしまうのか」ということも考えなくちゃいけないんだろうという話は出ていました。

まず、その辺を取っ掛かりにしながら、それにこだわらずお互い感想を述べてもらって、議論を始めていただければと思うんですが、向谷地さん、日置さんに対する感想はいかがでしょうか。

（向谷地） 大きなところでの共通点というのは、私も、ずっとこだわってきた、「生きる苦労の主人公になること」ということじゃないでしょうか。私は、たまたま統合失調症とか精神疾患を持った若者たちと一緒に、いわゆる起業というものを通じた活動を中心にやってきました。私は病院に身を置いたということもあって、いわゆる「社会復帰」とか、１つの「治療的なアプローチの一部分」を担ってきたというよりも、むしろメンバーといっしょに一種の「市民活動」をやってきたという方が近いですね。決してその治療の一部を私は担当していたわけではない。

私はソーシャルワーカーなんですけど、ソーシャルワーカーの感覚というのは、非常に「当たり前」で「日常的」でごく「普通のこと」を大事にするセンスだと思っています。そのごく普通のことが、統合失調症などを持つと、非常に「特殊化」「特別視」されて、「当たり前さ」を失った状況に陥るわけです。特に入院するとなると「保護、拘束」という人権の制限も課せられるわけです。一方、人間が普通、持って生きている「いかがわしい部分」、その「当たり前さ」みたいなものが、専門家がかかわることによって極端に「純化」されたり、聖人君子のような生き方モデルを期待されたりするわけです。それを「治療」だとか「援助」だとかということで括ることで、実は、今あることがさらに難しくなっちゃっているというようなところで、そんな中で「どう普通であるか」という、「どういかがわしくあるか」みたいなところを大事にしてきました。

ある方は、べてるの活動を見たときに、「『かどわかし』がうまいよね」と言ってくれた人がいましてね。いい言葉だなと思って。「そうだ、私たちがやっているのは『かどわかし』だよね」と相槌を打ちました。幻聴に対して「幻聴さん、こんにちは！」って話し掛けてみたりとか、それで、「幻聴さん」が帰っていったりとか。そういう今まで「科学的な根拠を持った治療」とか、いわゆる「ちゃんと説明しやすい考え方に基づいた援助」とかって、そういうものが、切り捨ててきたような「いかがわしい部分」が、実は、一番、人を元気にしたり、人を安心させたり、力を引き出す「大事な部分なんだ！」みたいな。

そんな中で、「当事者性」というのは、そういう自分の持っている「いかがわしさ」みたいなものを、そのある意味では、その「面白み」を「生きようとする人たちになること」という、そんなイメージで理解しています。そういうことで言えば、本当に、日置さんの今日のお話とか、今までずっと何回かいろいろなところでお話を聞いている中では、非常にある種の「説明しづらい」、「いかがわしく」て、場当たり的な場をつくることに、こだわりを持っていらっしゃるんだなと感じてきました。私が好きな言葉に、今は亡き勝新太郎の「偶然は完全である」という言葉があるんですが、「偶然性」というか即興的な場、しかしそれは決して単純に偶然じゃなくて、そこには何か説明しようのない、ある「必然的なうねり」が育っていく、そんな中で生きる人たちを、そういう生きやすさを取り戻していくというのが私なりのイメージだったんですね。

もう一つ大事なのは、「時代が締め出す心」ということでいえば、私は、病気を持った人たちや事情をかかえた人を「締め出された人たち」として見るというのは、非常に説明しやすいし、一見分かりやすいんですけど、しかし、実際その病気を持った人たち、またはリストカットとか、そういういわゆる問題を抱えた人たち自身が、実は、「自らを締め出す主体」に陥るという複雑さがあって、ただ一方的に「締め出す」以上に、私も含めて「締め出しているこの現実を担う人である」という相互的な理解が重要なのではと思います。そのように、「私たちもその現実

を生みだす一部でもある」という非常に入り組んだ形で、私たちは「締め出す」という現実を出現させている。しかし私は、一見、「問題」として起きている全体の中には、やはりその「問題」を「問題」という形を通して「生きやすくしようとする潮目」というのが絶対あると思っていて、その「潮目」をちゃんと読みながらいかないと、「問題」がまた「さらなる問題」を生むという「悪循環」になる。日置さんたちは、「潮目」を読みながら、そこに上手く切り込んでいると思いますね。

（日置） 感想でもいいですか。今、向谷地さんの言ったことはほとんどきっと頭の中というか感覚的には似ているので、同じようなことをしゃべるかもしれません。さっき宮﨑さんが最初に言った、「どうして社会は、こういう人たちを締め出すのか？」という問いには、たぶん向谷地さんも同じだと思いますが、私たち的には「『締め出すって？？　なぜ？』意味が分からない」という現象です。普通に、いろいろな人と出会って話をしていても、感覚的に、すごく率直に言うと、私にとってはそういう人たちの方が絶対に面白いんです。面白いし、いろいろなことを教えてくれるし、その人と話していると先が見えてくるような気がするんですよね。

それはなぜかというと、きっと「現実に向き合おう」としているから。「苦しい思い」をしているんだと思うんですよ。みんなが、仮に、大多数の人が「今は生きづらさを感じない」としたら、きっと「感じないふりをしているだけ」なんじゃないかなって私は思います。

それは、今、釧路の中でいろいろな人に出会っていて、普通に「感じなかった人たち」が活動にかかわったりとか、うちの NPO に勤めたりすることによって、「あっ！　自分が今まで見てきた世界とは、実は社会は違った」し、さっきのビデオの中にもありましたけど、「どうせ自分が何をやっても無理なんだ」と思っていたことから、「ひょっとしたら自分のやることで何とかなるかもしれない」というふうに思い始めるというところを見ていると、やっぱり「生きづらさ」というのは、そういう「病気」とされている人たちに象徴されているだけであって、その要素というのは社会の中に必ずあって、それに「気付く」か「気付かないか」、「どう表現されているか」の違いだけなんだろうって思います。それを「見過ごし」てきたからこそ、今「持続可能じゃなく」なっているんじゃないかなと思うので、私はどう考えても「それを教えてくれている人の方がすごくって、その人に学びたい」というふうに純粋に感じるということだと思います。

さっき向谷地さんの「偶然は完全である」という話を聞いて、私も「偶然」と「必然」のことはよく考えます。「偶然って絶対、必然だ」って自分で思っていて、どれだけアンテナを張っていろいろなことを感じ取っているかによって、偶然起こることを自分のものにすることができるかどうかって違うと思うんですよね。だから、たぶん日々いろいろな素材が自分の周りにはあって、それを何かのきっかけにするというのは、やはりいつもアンテナを張って何かを求めて、それこそ向谷地さんの話では、「活動している状態」であればそれをつかむことができると思うんです。

でも、現実を「見ないふり」をして、「これでいいんだ」と思い込んでいれば、大事なそこに転がっている何か気付きみたいなものが拾えない。そっちの方が問題なんじゃないかなと思ったりはするんですけど、どうでしょう。

（向谷地） そうですね。偶然って、きっと必然ですよね。偶然に生まれたものは、偶然というきっかけを待っている必然なんだとおもいます。偶然の話でいえば、先ほどの中尾さんは、先ほど紹介があったように統合失調症を抱えながら、体を鍛えようと思ってマラソン大会に出たら、たまたま今のご主人にばったり会って結婚することになっちゃったわけです。旦那さんの転勤で行ったところが、群馬県で唯一「当事者研究」をやっているクリニックのすぐそばで、そこに通ったらそこで「当事者研究」に出会っちゃって、そこで私たちと出会って、今回浦河に見学に来ることになったという、非常に偶然なんですよね。だけど、ただの偶然とは思えない不思議な縁を感じます。

私は、このような偶然という必然が起きにくい状態というのがあるのではと考えています。それは、保護や管理、支配です。「自分の苦労の主人公になる」

ということが保障されない社会では、偶然という豊かさが起きにくいと思います。そのことがあって、はじめて、人ごとが自分事になると思います。

それを、学校というシステムに当てはめると、「苦しいことよりも楽」、「不安定よりも安定」という軸が柱となって教育が営まれるというような気がするんですね。しかし、私は教育の中で見ていると、正常な意味で「人生はいろいろ苦難に満ちているのだ」という「受苦」的な部分が、学校現場の中に絶対必要で、それをそぎ落とした形で何かある種の幻想的な「幸せのパイ」を、「どうやったら独占できるか」的な発想に基づいた在り方そのものが、私たち自身が「自分の主人公になること」、「生活当事者になること」を難しくしているような気がちょっとしているんですね。

ですから病気を持った人たちが、今まで病気だから「治療の回復の手綱を握っているのは、医者であり専門家である」と。その専門家である人たちが腕を磨いて、より診療技術や治療技術を高めれば、結果としてその人たちに「回復」という幸せが訪れるという、これもものすごい「幻想」でして、実は回復の８割がたはその人自身の中と、その人の置かれた「環境の総合性」の中に私はあると思っているわけですね。そういう意味では、今、時代も変わってきて、精神科の治療の世界の中にも、「当事者研究」的な発想が急速に広がってきていまして、いい形で時代は変わってきているのかなという感じはしています。

（日置） 私もやっぱり時代は変わってきているというか、変わり目にあるんだろうと思っています。一般論として、誰が言っているのか分からない議論としてしまうと、全体として「こういう人が締め出されている」とか、あと、「強者と弱者がいて、勝ち組がどうの」とかという、何か抽象化された議論になるとそういうふうになるのですが、私は少なくともいろいろな人に出会って、いろいろな場面でこういう話をしたときに、あんまり否定されることはなくて、共感してもらえるという実感がすごくあります。

これは東京とは話が違うようですから、北海道の地域性も影響しているかもしれません、湯浅誠さんとよく議論しますが、「東京では違うよ」ってよく言われます。少なくとも私は北海道をフィールドにしているので、北海道のいろいろな現場に、学校も含めて、そういう公的なところも、行政機関も含めてですけど、こういう話をして、「一人一人を大切にしよう」って、「そこの生活から積み上げていくような地域をつくっていこう」という話をしたときに、「何を言っているの？」と言われることはほとんどないんですよ。実は本当はそう思っているというのは、個人レベルで話をすると、すごくみんなは「本当はこう思っているんだな」というふうに実は思うんですよね。

最近も、私はスクールソーシャルワーカーをやっていて、札幌市内の小学校についこの間いってこんなことがありました。不登校の男の子がいて、いろいろな大変な思いをして学校に来られなくなっちゃったのですが、先生たちは、お父さんも悩んでいるし、先生たちもどうにかして「その子を救いたい」ということで、どうしたらいいだろうかというふうに私に声を掛けてくれました。行って話を聞くと、非常に、これはたぶん、べてるも、「それで順調」、何でしたっけ？

（向谷地） 「それで順調」。

（日置） 「それで順調」ですよね。私も、その子の話を聞いたら、「すごい順調につまずいているな」って思ったんですよね。ここで「学校へ行かない」というのは、まっとうな彼の選択だろうというふうにすごく思えたのです。今、彼は、少し一休みをしてじっくり考える時間を持って、次にきっと進むことができるだろうと。それを支えて心配している学校もいるし、お父さんもとても親身になってかかわっている。今の状態でただ「不登校」というところを切り取って、「それをどうしようか？」と思っても意味がなくって、「すごく順調」に発達、成長しているし、彼は力があるし、周りもしっかりしているから「大丈夫ですよ」という話をしたら、すごくみんなが納得をしてくれて、校長先生も「本当にそうですよね」と言ってくれました。

だから、最近、「不登校の子が、学校に行くだけがすべてじゃないんじゃないですか」って、「今つまずいていることが彼にとってすごく大事です」という

ことを言ったときに、学校の先生がたが違和感を持たずに、「そうですね」と言ってくれることが非常に増えているので、本当はきっと１人の人間に戻ったときには、そう思っているんじゃないかなと思います。ただ、学校の校長先生だったりとか、親という立場とかというものがあると、そういうものよりも「何か違うもの」に負けちゃってというかごまかされて、それこそ向谷地さんの「幻想」じゃないですけど、「幻想」が「こういうふうがいい人生だろう」って、「こういうものがいい人生に違いない」というようなものにとらわれちゃって、本当に大事だと思えることがおろそかになっちゃう場面があって。

それは最初に宮﨑さんが提示した、「人がつくる社会なのになぜ生きづらさが生じるのか？」というのは、「人がつくったシステムに支配されている」というか、人間がつくったシステムなんですけど、システムが「肥大化」したり「高度化」したりしていく中で、人間の力の及ばないところでシステムが独り歩きしていて、それに「だまされちゃっている」ことになるのだろうと思います。でも障がいのある人とかは、「だまされ」ないんですよ、そのシステムに。だから、「ちゃんと不具合」を起こす人なので、本質が分かっているなと思って、私はそういう人たちとかかわると本質が見えて面白いなと思います。

（向谷地） 生物学の世界で共生ということを語るときに、共生というのは、「対立」を経ずして生物は成立しない。共生というのは、もうあなたなしでは生きられないという、生物学的には、そうらしいんですけれども、そういう意味で、「共生に向かう上でのプロセスとしての対立」という、避けて通れないその「軋み」の部分というものを、むしろ大事に、私たちはどう生きるかというか、そういうことが起きないことよりも、そういう「前向きな軋み」の部分を、本当にお互いが生きやすくする次なるステップにどうつなげていくかという。私は釧路の皆さんとのわいわい、がやがやの雰囲気を見ると、ある種の非常に、そういう意味で有機的なエネルギーを感じて、とても興味深かったですね。

私は今日ここでお話しするテーマに「当事者研究」取り上げいますが、先ほどの中尾さんの話は、教科書的には、専門家はタブー視してきた世界です。だからこそメンバーは、語ってこなかったし、見ないようにしてきたし、薬で何かあいまいにすることで何とか生き延びようとしてきた人たちが、その自分の世界の持っている可能性に着目し、そこに逆に意味を語ることを通じて見いだし始めています。そこにこそ「自分自身で共に」という「当事者研究」の軸があるんですけれども、一人一人がそういうふうな「自分になっていく」ということと、一方では、「当事者研究」なんか全然しないで、ぱっと地域の人たちの中にぽっと入っていっても、もう何病であるかそんなこと関係なしに、そっちの方がうまくいく人たちが確実にいるんですよね。この辺ってとても面白くて、どうですか、日置さん。あんまりあの中では、その人が何病を持っているかというのは、あんまりもう意味がないわけですよね。糖尿病を持っていようが、統合失調症を持っていようが、あんまり関係ないし、それが重視されないですよね。

（日置） されないですね。そういうことでつながるきっかけにはなるんですけど、でもそんなの関係ないですよね。

（向谷地） 関係なくなっていって、その人の持っている、「私はこの病気を持っていたから生きづらかった」みたいなことがだんだん薄まっていって、あまりそういうことが関係なしに、より現実的なことで生きられるようになるということになってくると、皆さんは不思議に統合失調症に戻りたくなるというか、自分の足場を失ったような、そういう不安を訴える人たちがいて、もう１回病気をやりたくなる。実にあれは不思議なんです。特にこういう、先ほどの日置さんのお話の中でも、結構、人間関係ってややこしいことが起きてきますよね。いろいろな人たちがいればいるほどいろいろなことが起きてきて。そういうことがあると、また病気が懐かしくなって、「すみません、今日から病気やります」というふうになる人たちも出てきますね。

（日置） でもそれも含めて「普通」のことですよね。

（向谷地） そうなんですよね。

（日置） そういう「すっぱり治る」とかがいいわけでもなく、「そういう自分と他人とどう折り合いをつけるか」ということの連続性なので、「こうなればいい」って直線的にいい方向に向かっていくということは全然ないですよね。いつもこうなったりこうなったりですよね。

（向谷地） 私は札幌に出て来て思うのは、札幌もいろいろな活動が盛んで、障がいを持つ人が活用する作業所もあり、就労支援のプログラムもあるんですけど、結局、例えば中尾さんのような立場の人たちが、ドロップアウトしてどうにもこうにも、この社会で、いい意味での「いかがわしさ」に乗っかることができないでいる、そういう層が結構いるんじゃないかと思うんですね。

（日置） 札幌は相当いますよ。

（向谷地） 浦河では、いわゆる「幻聴さん」が聞こえたり、町の人たちから見ると身だしなみがしっかりしない人たちとか、そういう人たちが道路に座っていたりとか、道端の草むらで昼寝していたりとか、時には、独り言を言ってたりするんですが、そういう人たちが札幌に来るとほとんど見当たらないのはどうしたんだろうなって思うんですよね。「いかがわしさ」という空間をつくるためには、そういう人たちは貴重な人材なんですよね。

（司会） そのあたり、つまり「いかがわしい空間」とか、「前向きな軋み」っておっしゃったんだけど、そういう経験ができる場をどうやってつくっていけばいいかというあたりの話を、もう少ししていただければと思うんですけど。

（向谷地） 釧路はどうやって「いかがわしさ」を維持しているんですか。

（日置） 「いかがわしさ」の維持の方法ですか。釧路は、ある意味、浦河と同じかもしれないですけど、町自体がもう切り離されたというか、排除された町になっていて、先ほどお伝えした通り、生活保護の受給率がどんどん上がってしまって、失業率も高くって、地方財政も危なくって、行政もすごい危機感なんですよ。だから、さっき向谷地さんが「目の前の人が明日の自分だ」と言いましたよね。「明日の自分かもしれない」って。私もそういう感覚がすごくあるんですけど、わりと釧路の人たちは、「明日の自分だ！」感覚が札幌に比べるとかなり高いと思いますし、それはずいぶん影響していると思うんですよね。

（向谷地） それは浦河もありますね。私は浦河で暮らし始めたときに、「あっ、浦河で暮らしている人は、みんなが弱者だ」と思ったんです。そこが逆に、こういう病気をした人たちの生きやすさにとって、プラスになっているなと。町で暮らしている人たちも、お店を営んでいる人たちも、実は売り上げに苦しんでいたりとか、国道の拡幅のときにもあったんですけど、拡幅して保証金が出るといったら、その保証金をめぐってちょっと家族の中でごたごたが起きたりとか、お店を閉じるかやるか、その大変さを耳にしたときに、町の人たちも苦労していると思ったんです。浦河は、みんなが大変で、そのみんなの大変さみたいなものが地域からにじみ出ているわけですね。

　するとある種の、自分たち統合失調症を持った人たちの生きづらさといったときに、その自分たちの生きづらさと、町の人たちの生きづらさみたいなものの境界線があいまいで、勝ち組、負け組なんていうそういう単純な切り口では説明つかない、病気している自分たちが帰ってくる地域という地域自体も疲弊している。すると病気を抱えた人たちの社会復帰だって、そういうことって非常に非現実的だということに気がつくわけです。そこが釧路と共通しているところなんだとおもいます。

（司会） その点で、「明日は自分自身だ」という感覚が、浦河も釧路も潜在的にはあるだろう。だけどそのときに逆に、向谷地さんの言葉を借りると、「純粋なアプローチ」を、普通、専門家に依存してしまいがちになってしまうということも起きますよね。自分自身の苦しさに向き合うということが、誰でもできるわけじゃない。だから潜在的には同じような苦しさをみんな持っているのに、それに向き合うとい

うことができないで、さっき日置さんだったら、「感じないようなふりをしているんじゃないか」と言いましたけど、じゃあ、その苦しさに向き合って、苦労に向き合っていく条件はいったい何なのかということを、そのあたりも含めてそういう場をどうつくるかということで、もう少しお話しいただけますか。

（日置） その辺がきっとこれからの課題だと思いますが、昨日の例えば「働く」セッションのときにも、「今の働き方は悲惨だ」という話はよく分かって、「じゃあ、そうじゃない働き方というのをどうつくるか」というところまで、なかなか踏み込めなかったのが私としては残念だった感じはしました。実際NPOという形で雇用を生みだして、いろいろな人たちが働けるようにするというのは、実は大変で、いろいろな人を「オーケー」と言えるというのは、たぶん働く場で一番苦労すると思うのです。

さっきの冬月荘の勉強会とか、そこであんまり市場主義の及ばないところでやる分には、「ああ、みんなが生き生きしていていいね」というふうになるのですが、それがいざ１つの企業として事業を成り立たせるようにするためには、収入を得て給料を払ってということをしなければいけないので、そこの仕掛けというのはとても簡単でもない気はしますが、でもそこに可能性が私はあるような気がしていて。

べてるなんかは昆布を売ったりしていますよね。「起業しながら」とおっしゃっていたあたりは、私も同感で、どれだけ仕事をつくっていけるかというか、企業の主体にこういった発想を持ってなれるかというところは、すごく重要な気がしますし、今、でも一般の企業も、「今までのやり方じゃまずい」と思い始めている人たちが結構釧路なんかにもいて、その多様性を活用して、「実は効率が上がる」とか「うまくいく」ということを、「それが生産性を単純に落とすわけじゃない」というようなことに気付き始めている人たちもいるので、だからいかにそういうところを増やすかというのは、制度もうまく使わなきゃならないし、人がうまく動くシステムを組織の中につくらなければならないし、いろいろな失敗を繰り返しながらやっていくことだとは思うのですが、その辺、苦労は、いかがでしたか？　起業していくという意味で。

（向谷地） 私も、もう三十数年前に浦河で、ワーカーとして仕事を始めたときに、一番最初に何をしたかというと、やはり起業なんですよね。「この人たちと一緒に何か事業をしたいな」と考えたんです。それは、やっぱり働く、お金をもうけるとかというその仕組み、そこには根源的ないろいろなテーマとか、いや応なしに人とのつながりや利害関係が生じてくる、お金をもうけるというそれ自体が「いかがわしい」部分がありますよね。そこに逆に魅力を感じたわけです。うそのない部分かなと思って私は「とにかく金もうけをしよう」と。

すると面白いことに、今までそういう「締め出されてきた人たち」が、「締め出されてきた人」同士で商売をやろうって集まってくると、またその場の中で「締め出し」がはじまるんですよね。「あいつよりも俺は一生懸命働いているのに、同じ給料もらうのは許せない」とか、「あいつは働かないで寝てばっかりいる」とか、「遅れて来る」とか、というような、結局「締め出された人」たちの中にまた「締め出し」が始まりという、ある種の「締め出しの連鎖」みたいなものがある。

私はそこでとても大事にしたいなと思ったのは、今日のテーマでもある「締め出し」というのは、「誰かが自分を締め出している」という「外の問題」としてあるんじゃなくて、「締め出す」ということは極めて自分のことなんだということです。「病気だから締め出す」ということ以上に、この「締め出す」ということを、構造としては「社会から締め出されている」ということがあったとしても、それを現実に今この職場で「締め出している自分」がいる。「締め出された人たち」がまた集まれば、そこでまた次なる「締め出し」が始まるという、この何か「ジレンマ」みたいなものを通して、「そうか、これは人間の持っている仕組みの中にある絶えることのないものなんだ」ということがわかってくるんです。

そこから逆に、そこでなおかつ働いてお金を生みだして、そして地域に喜ばれる活動としていくという、そのテーマにみんなが本気になっていくというか。そこでその「矛盾」を、「ジレンマ」を乗り越える手だてとして、結局自分の「ジレンマ」を常に前向きに場の中に返していく。「弱さの情報公開」と言っているんですけど、なかなかエンジンがかから

ない人は、自分が「午前中はエンジンがかからない」ということをみんなに伝えていくわけです。最初はスタートダッシュは素晴らしいんですけど、すぐ燃え尽きるタイプの人は、「自分はそういうタイプだから皆さんよろしく」ということを、ちゃんと場に返しておくとか、そういうリスクを積極的に出して場の中に返していくという仕組みをつくっていくと、不思議にみんなへこたれないで力が持続するということで、これは結構面白そうだなと。

私はその辺が、むしろ「弱み」を積極的に活用していくとか、「自分の苦しみの部分をもっと積極的に活かしていくような仕組み」というのが、これから持続していく上で1つのキーワードなんじゃないかなって、そんな感じがちょっとしていますけれども、

（日置） その仕組みが結構難しいですよね。仕組みも大事なんですけど、そもそも「締め出さない」社会というのはないような気がするんですよ。だから「締め出す心」って絶対に誰の中にもあって、それがすごく強く表出される仕組みとそうではない仕組みというのがたぶんあるはずで。でも少なくとも「自分も締め出す側にもなるし、締め出される側にもいつでもなるんだ」ということを自覚する必要がありますよね。

（向谷地） そうですね。

（日置） それを知っていれば大丈夫というか、「お互いにそうだよね」ということを承認し合っていれば大丈夫で、その上でみんなが弱さを出し合ってもうまく回るような組織なり、仕事の働く場というものをつくっていくというのはすごく大事ですけど、難しいですよね。

（向谷地） 難しいですけどね。おそらく釧路も10年ちょっとですか。

（日置） 10年、はい。

（向谷地） 浦河もちょうど今年で33年続いているんですけれども、私はやはり、最初、統合失調症を持った人たち、ほとんど「生産的に」とか、「合理的に」とか、何か強い志を持ってということにおいては、まさに縁遠い世界で生きてきたような人たちが、やっぱりこれだけ持続して何かを生みだし、何か1つの大きな活動を成してきている。そこにやっぱり不思議な〝一環したもの〟があるような気がします。誰かにぜひ研究してほしいと思うんですけど。

（日置） 私たちの職場はいろいろな人たちが働いていて、障がい者の方ばっかりではなくて、いろいろな人たちが、今職員が160人ぐらいいるので、働いているんですけど、「どうしてここで働いているか」とか、働くモチベーションとかを聞いてみたら、分かったのは、一人一人全然違うんですよ。

私がNPOとかの話をすると、「そういう大きくなったら志をみんなで1つにするのは難しいですよね」とかって、「どういうふうに皆さんの気持ちを1つにしているんですか」みたいに、よく聞かれるのですが、それこそ幻想で、みんなが同じことを、社訓のように、それに向かって「みんなが1つになる」とかというのは気持ち悪くって。「一人一人が『いい仕事』、『自分らしい仕事をしたい』ということが、お互いに実現できるような場が必要だな」って私は思っていたので、それで職員に聞いてみたら、いろいろな実現の仕方というか、自己実現の仕方があったんですよね。

ある20代の、高校を卒業してすぐにヘルパーになった若いスタッフがいますが、そのスタッフは、例えば働くモチベーションは何とかって聞いたら、「嵐」の松潤が大好きで、「私は年1回嵐のコンサートに行く日に休みがもらえればそれでいいんです」と言っていて、確かにうちの会社は自分の好きなときに休みが取れるようになっているんですよね。普段は流動的なヘルパーの仕事とかだと、急にキャンセルがあったり出番があったりして、でも彼女はすごくいつもそれを快く引き受けてくれて、みんな「すごいね」と言っていたのですが、実はそれは「嵐」の松潤のためだったんですよね。別に組織のためにやったわけではなく。

だからそういうのが私はいいなって。みんなが「社会理念のためにこういうことを実現しよう」とかっていって働くのは、ちょっとうそっぽいというか。本当の「いかがわしさ」は、やっぱり「松潤のため

に私は働いている」ということを、みんなが「それっていいね」と言えることの方が、私は大事だと思っています。

（向谷地） だいたい「べてる」のメンバーたちが働き続けられなくなるときの条件のとき、それっていつも同じで、人からだいたいどう思われるか、人の評価を気にしたり、自分の歯車じゃなくて人の歯車に自分がどうはまろうかみたいな、そういう発想をすると、ほとんどみんな暗礁に乗り上げるんですよね。これは本当に共通していて、「他者評価」とか「他者の基準」とかから自立して、自分の基準とか自分の歯車の回り具合の傾向とかをだいたい理解して、「私はこんな歯車ですから」とか、「だいたいこういうペースですから」みたいなことを、周りにちゃんとアピールして、そしてそれが尊重されたときに、非常に持続的な力が出てきて周りとうまく絡めるという、そういう感じがあるんですね。

それから言えば、今の就労現場も学校現場も基本はまず自分じゃなくて、常にまず他者評価みたいなものががっちりあって、「どう人の目を満足させるか」的なところからスタートして、みんな自分を置き去りにして自分を見失っているようなところがあって、それをもう１回立ち位置というか軸を移す、見極める作業を、私は浦河でみんながやっているのかなという感じがしますけど。

（日置） まさにそうだと思います。その中で意識して自分がやってきたのは、最近、宮﨑さんとの研究でも言葉にしたんですけど、「概念壊し」というのをよくやるんですよね。みんなが「それが当たり前だ」とかと思ってしまいがちなことを、あえて「本当にそうなのか？」ということを自分でやってみたりとか、投げ掛けてみたりとか、概念を壊してくれた人を持ち上げてというか、取り上げて、みんなで考えてみたりという。やっぱり既成概念とか、「それって当たり前だよね？」という、さっきの話では「幻想」みたいなものを、どう壊していくかって。

だから、たぶんこれからどうしたらいいかということで、今、話が移ってきたんですけど、システムがどうとか、人に対してどう働き掛けるかとかということではなくって、自分たちの頭の中にある「概念」みたいなものを、どう揺さぶって壊していくかということが、どうやってできるかなというのを考えていて、たぶん、向谷地さんもこの前あそこで話をしたときも、わざと、わざとじゃないかもしれないですけど、「えっ？」ということを言うじゃないですか。それはわざとですか？

（向谷地） ぽっとね、浮かんだりする。

（日置） 浮かんじゃうんですか。それは無意識的に？

（向谷地） ほぼ無意識の世界です。（笑い）

（日置） ああ、そうですか。でもその辺が大事なんだろうなと思うんですよね。みんなが「当たり前」と思ったことを、「えっ？」と思わせるというか、思う瞬間がこれから大事で、それがたぶん「いかがわしさ」につながっていくんじゃないかと思います。でも、結構みんな「いかがわしい」のが好きですよね。

（向谷地） ですからね、私はこんなことを言っていいのか分からないですけど、病院に勤めて、科学的な根拠に基づいた○○アプローチ、何とか理論、いろいろなこと、はやりすたりがあるわけですね。すると研修会で高いお金を出して勉強してきて、何か分かったような気がすると、また新しい考え方が出てきて、それでまた「これを勉強をしなきゃ」ってずっとやってきたんですが、正直言って、そういうのを駆使して治った人って見たことないんですよね。ここにそういう関係者がいたら大変申し訳ない。

最近、リストカットが最近止まっている２人のメンバーさんにお話を聞いてみたら、「最近リストカットをしないけど、主治医の先生の治療が功を奏して、また専門家のカウンセラーの素晴らしいカウンセリングとか、アプローチが功を奏して、あなたはやめたんですか？」って聞いたら、「そうじゃない」って。リストカットをしたら外科の先生に縫ってもらって、リストカットしたらまた外科の先生に縫ってもらって、縫ってもらったら今度は自分で抜糸して、また血だらけになって、また今度別の病院に運ばれ

てまた縫ってもらって。そういうふうにしているうちに外科の先生が「もう、やめた」と言って、もう縫ってくれなくなって、精神科の先生のところに差し戻されて、そうしたら年配の精神科の先生が、「俺、しばらく縫ったことがないんだよな」って、老眼をしょぼしょぼさせながら必死になって縫ってくれた。それを見た瞬間あまりにもかわいそうで、かわいそうで、その先生に「こんな惨めな思いを絶対させたくないと思ったらとまった」と言うんですよ。

（司会） 医者の「いかがわしさ」が（笑）。

（向谷地） もう１人の人も、この人も似たような経験をして、もう外科の先生たちからも縫合はできないと言って精神科の先生に戻された。これは浦河の川村先生という先生なんですけど。「俺は、10 年以上は縫ったことないぞ。俺は 10 年前に縫ったときに、麻酔を打つのを忘れたよ」って。

（日置） ひどい。

（向谷地） そうやって、「俺が縫ってやるか？」と言って、「どうやってやるんだったっけ？」みたいなことで。わざわざ危うさを演出して、手を震わせたりして。そうしたらそのメンバーさんの方も、「先生、大丈夫ですか？　もうやめてください」みたいなことを言って、それでも何とか縫ったらしいんですけど、「いやあ、やっぱり下手だな、俺はな」と言って。「全然めちゃくちゃだ」なんて。それから全然その患者さんは切らなくなったんですよね。だいたいそういうレベルで起きているんですね、いわゆる回復とかって。決してそんな高尚な治療とかじゃないんですよね。これは面白いなと思いましたね。

（日置） だからそれは専門家と患者という関係性ではなく、そこにあるのは、人と人とのかかわりですよね。

（向谷地） 限りなくそうですね。何かある種の情緒的な、「ああ、この人も同じ人間だ」という、そういうレベルで何か物事というのは、実は、大事なことって動いていて、高尚な専門家としての理論レベルで起きているんじゃないんじゃないかなと思う。これは大変申し訳ないですけれどもね。

ですから「当事者研究」をやっていることのエネルギーというのは、私は中尾さんたちを見ていても、そういうところに近いところでみんな、「当事者研究」をやっているんだという気がしますね。

（司会） いろいろな専門家の方がもしこの場にいらっしゃったら、向谷地先生は「申し訳ない」とおっしゃったんだけど、そういう方もいらっしゃるかもしれません。「でもどうなんだ？」というような声があるかもしれませんから、何かありましたらいかがでしょうか。

（質問１） いつも、お２人の実践を実際に聞かせていただいて、感動して、共感することが非常に多いんですが、先ほど、「変化とは理論レベルで起こるわけじゃない」と。「現場の人間らしい、人間同士の『いかがわしい』関係だ」と、それは現実、そうかもしれませんけど、私から見るとお２人の実践というのは、私の教育学を現場で実証してくれているぐらいの、つまり理論レベルでも変革が必要になっていて、今日お話しになったのは、極めて個別的、特殊的なんだけど、ここに教育学の可能性があると私は常々思っていまして、非常に共感しています。私がまたこれからしなければいけないことも考えさせられたんですけれど、今日のテーマは人が育つシステムを考えるということなので、それに限ると、今、例えば持続可能な発達のために生涯学習社会とか、知の循環型社会とか、そういうことを前提にしたいろいろなシステム開発が進められているんですけれど、そういったものが逆に差別、排除を生みだすというような現実がある。その中でお２人の実践は、非常に重要な問題提起をしていると思うんだけど、実際には２人がやられたのは、ある種の実践コミュニティーづくりだとか、たまり場づくりというようなところで、これは、たまり場システムという言葉もちらっと要素の中に出ていましたよね。実際厳密にはこれはシステムと言わないんだと思うんですよね。システム的に見ることもできるんですけど。

現実にお２人が、特に地域づくりの実践だとか、それから学校ですね。学校改造計画とか、ハイスクー

ルですね。オルタナティブをつくるとか、現実にかかわってきたわけですよね。そうした中から、現在のシステムをどう変えていったらいいのか、どういう世界をつくっていったらいいのか。それらはいわば教育のシステムをインフォーマルな活動と制度化されたシステムの間を媒介して、そこを新しくつくり変えていく実践、ノンフォーマルといいますかね、そういう実践だとは思うんですけれど、そういうことを経験されて、どういうふうな教育のシステムの改革ということの提案ができるか。実際、活動にかかわった経験を踏まえて、一番教えていただきたいのはそこにあるんです。

例えば私たちは釧路の教育委員会に行って、「ある種のシステムをつくり出さないと」と強く感じて帰ってきたんですけど、「これはどう変えたらいいのか？」ってずっと悩んでいるわけですけど、実際そこに入り込んでどういうような新しいシステムづくりが可能なのか、その場合の課題はどこにあるのか、そのあたりのことをもう少しお話しいただきたいと思います。

（司会） ほかの方はいかがですか。今のお話は、要するにシステムをどう変えればいいのか、とりわけ教育のシステムをどう変えればいいのかという展望を語ってほしいということですね。

（質問２） 向谷地先生から学校改造論ですか、今日お話を少し伺えるのかなと思ったんですけど、あんまり具体的なお話が出なかったように思うんですけれども、ご紹介いただけるんだったらいただいて、例えば日置先生がそれに対して共感するところがあるのかとか、何か新たな切り口があるのかとかコメントをいただければなと思います。

（司会） 学校改造論の評価ですね。ほかはよろしいですか。じゃあ、システム全体をどう考えるか、とりわけ教育のシステムを変えていく展望があるか。

（向谷地） この辺については、もういろいろ語り尽くされている部分もいっぱいあると思うんですけれども、やはりこの「学校改造計画」でも別に大それたことを考えているわけじゃないんですよね。これは一種の「ノリ」ですよね。

（日置） 同じです。「ノリ」です。「ノリ」は大事です。

（向谷地） リストカットして学校に行けなくて、学校で物を壊したりとか、そういう「問題児」扱いされている人に、私がその生徒さんにかかわるときに、「どうしてそういうことをするんだ？」って、「学校を改造する計画ってやってみない？」と言われたときに、本人はびっくりするんです。「あんたのような経験を持っている人が学校に行きたいなと思う学校って、どうやったらそういう魅力的な学校になる？ ちょっと自分で設計図を立ててみない？ ちょっと提案してよ。」そうすると生徒さんは立ち上がるわけですよね。

その辺の感覚というか。そのことに基づいてシステムができてくるというか、形が生まれてくるので。先にシステムがあるんじゃないというか。逆にシステムというのは、「そういうものを邪魔しないシステム」というか。そういうのりしろをちゃんと、生徒自身の問題解決能力とか、奇抜な発想とか、そういうものを受け入れていく。学校にしても企業にしても社会にしても、先に「システムありき」でそういうものがどんどん押しつぶされていって、「ああ、システムに寄り掛かっていた方がまあ、いいや」みたいな、そういうことが結局今の社会全体を生きにくくしているわけですよ、簡単に言えば。

ですから、私が最近やっぱり魅力を感じるのは、日置さんたちが釧路でこういうことをされた。そうしたらそのなされた実践によって新しい事業が生まれ、それを認められて、国が政策レベルで少し取り上げてみる。これが本当のシステムであって、「先にシステムをつくらない」という。そういう柔軟性にどんな仕組みをどうつくるかという、ちょっとあまりにもぼう漠としていますけどね、そんなことを考えているんですよね。その方がうまくいくし、統合失調症を持った人たちが自分たちで会社を立ち上げて、30年近く存続しているわけですよね。「これって社会で使えますよね」って。この人たちが続けられる、しかも経済的にも非常に生産的である。

今年の１月に『日経ビジネス』に「非効率経営」

という特集があったときに、「べてる」に日経の記者が取材に来たんですけれども、多少お世辞も入っているかもしれませんけど、町長が１つコメントを書いていまして、「べてるは浦河の町の税収にも貢献しております」みたいなことを書いていましたけど、決してそれは矛盾しないという。まあ、そんな感じです。

（日置） 同じく、システムを変えようと思うより、やっぱり現実から何が必要かということを積み上げていったら、きっとシステムが創造されるというプロセスの転換みたいなものが重要だと思っています。あとは、１つだけ、コミュニティハウスもシステムとして道州制の特区を使いながら、国に提案をしたのですよね、あらためて。提案をしたときには、わかったのは、既存のシステム、教育もそうだと思うんですけど、どちらかというと規制するシステムだということです。福祉はまったくそうですが、規制法が基礎になっていて、どうやって、それこそ「締め出す」かというか、公金を使う上で「どういうふうなものだけを認めるか」ということを、法律で全部システムとしてつくっていくわけですね。

だから、「こういうのはだめですよ」、「ああいうのはだめですよ」というためのシステム設計がされているので、コミュニティハウスを制度設計として提案したときには、枠だけを国が定めて中身は地域の中で柔軟に考えていく、評価も地域の中で合意形成してやっていくというような、要は、規制するようなのとは逆のシステムを提案したら、やっぱり国としては、そういう発想を持ったことがないので、今までのシステムをやっぱり否定することになってしまうので、それを取り入れるというふうにはならなかったんですね。

ただし、そういう発想が今、地域で必要だということは、非常に分かってくれているので、「じゃあ、今までのシステムとこれから必要とされているシステムを、どう折り合いをつけて設計していくか」ということは、少し考えてくれそうな気はするんですけど、そこも含めて、やっぱり私は「システムをつくることに、当事者がかかわれなかったということを最も反省しなきゃならない」と思っているんですね。

だから私も、きっと向谷地さんもやってきたことは、システムをつくっていく基（もと）を、最もシステムを必要としている人たちが担うというか、一端を担っていって、そこからちゃんとシステムがつくられるし、改良されていくという回路をつくることなしに、「システムをどう変えようか？」と言ってもたぶん無理だと思います。私は、大事なのは、当事者、市民、システムを使う、必要としている人たちが、どうシステムづくりに参画できるかという基盤整備をしなきゃならないと思っています。

（司会） どうもありがとうございました。大切な論議がたくさん出されていたと思います。残念ながら終わらざるを得ませんけれども、一言だけ申し上げますと、お２人のお話に共通していたのは、人間のありのままの姿からもう一度発想し直してみよう。ありのままの姿というのは、ジレンマを抱えながら生きているわけだし、今日のキーワードになってしまいました、「いかがわしい」存在が実は人間であるし、あるいは不安定な存在であるということ。それが人間の現実態だということですよね。

そこからその現実に向き合って、それを含めて自分らしくいられる、そういう場、働く場もそうですし、学ぶ場もそうですし、自分らしく居続けることができるような場を、あるいはシステムをどうふうにつくっていくのか。そのために今日お２人が、「たまり場」ですとか、「当事者研究」とかいろいろな方法でアプローチをされているのですが、そこから学びながら、我々としても理論的に、その展望をどういうふうに出していくのかということを考えなくてはいけないと思いました。

どうも本当にお忙しい中ありがとうございました。お２人にもう一度拍手を。（拍手）